
冬の向日葵

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の向日葵

【Nコード】

N0689Y

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

「わかってほしいのは貴方だけ。
隣に居てほしいのも貴方だけ。」
願い事は1つ。
彼の隣に居たい。

Sun Flower・part 1

「なあ、灰原。」

「何よ。」

「え、いや・・・起こってるのか?」

朝、学校に来たコナンは隣の哀に話しかける。

「別に。どうして?」

「いや、にらんでるように見えるからよ・・・」

「もともとこういう顔なのよ。」

気を悪くしたなら・・・ごめんなさい?」

ちよつと荒い口調で言った。

「べ、別にそういうわけじゃ・・・」

もつと怒らせたかと焦るコナン。

「私なんかにかまってないで、彼女を元氣付ける方法＼を
考えれば？」

最近また、泣かせてるそうじゃない？」

「そ、そうだな・・・」

「電話をしてみるとか、いろいろあるでしょ？」

乱暴に教科書を置いていく。

「哀ちゃん、どうしたの？」

「あ・・・別に、なんでもないわよ。」

「すっげー変わりよう・・・」

「何か言ったかしら？」

「何も言ってません。」

「そう。」

「コナン君と哀ちゃん、何はなしてたの？」

「他愛のない話しよ。」

「ふうん。」

歩美は人差し指を顎にあてて、？マークを浮かべた。

Sun Flower・part1 (後書き)

やあつと書ける日がきました！

mineさんからのリクエスト小説です。

蘭と哀の恋のバトル！！

どうなるのでしょうか？

これからも宜しくお願いします

Sun Flower・part2

「「お・ん・せん！お・ん・せん！」」

歩美、元太、光彦の3人は嬉しそうにはしゃいでいた。

ここは阿笠邸の前。

「それにしても・・・博士と灰原さん、遅いですね・・・。」

「ちよつと待つててつて、15分前に言っただきりだね。」

「腹でも壊してんじゃないの？」

「・・・元太君じゃないんですから・・・。」

「ま、取り合えず寒いから博士ん家で待つてよーぜ。」

「賛成！！」

「はーかせゝまだあ？」

「まちくだびれてしまいましたよ。」

「俺なんか腹減っちまったぜ」

「なにやってんだよ。」

「すまんすまん。昨日のうちに準備してなくてな・・・」

「だから言っただじゃない。」

もう準備したの？って。　　ったく・・・。」

「ははは・・・」

もう苦笑いするしかない。

「仕方ねえ・・・俺達も手伝うぜ。」

「そうですね!」

「皆でやったらすぐ終わるもん!」

「よし、やるぞー!」

「」「」
「おー!」「」

何に対してもハイテンションな3人に

小さく笑う。

「そういえば・・・彼女に電話してあげたの?」

「え?あ、ああ・・・まあな。」

ズキンッ

「そう・・・」

「・・・？何か、怒ってねえか？」

「気のせいよ。」

「？」

「ほら、さっさとこれを運んでくれる？
じゃないと日が暮れるわよ。」

そう言い放つと哀はスタスタと歩き出した。

「・・・なんだあ？」

コナンの頭の中は？マークでいっぱいだった。

「やっと出発だね！」

「楽しみです！」

「たくさんお土産買ってかなきゃな!!」

「食べ過ぎるなよ、元太。」

「わ、わかってる……」

「……どっかの誰かさんも、あんまりのろけないでよね。」

「はあ？それって、俺のことかよ。」

「さあね。」

哀は静かに窓の外を眺めた。

Sun Flower・part2(後書き)

文化の日・・・は

部活の打ち上げ会です

部活が終わってそのままドンキへ直行なのですが・・・。

声がでない・・・！

明日は部活、見学だわ・・・。

Sun Flower・part3

「やあつといけるね 温泉。」

「ほんとですね。」

「つたく博士、準備にどんだけかかってんだよ。」

「まあ、今度からは灰原の言うとおり
前の日から準備しとくんだな、博士。」

少年探偵団の言葉に博士は苦笑い。

「ふああ・・・ほんとならもつと寝ときたいのに
博士にたたき起こされた私の身にもなつてほしいものね。」

「すまんのぉ、哀君。」

「私、寝てるから着いたら起こして。」

助手席に座る哀が冷たく言い放つ。

「おい、博士。

灰原、いつもに増して機嫌悪くねえか？」

「わしが起こしてしまったからだろう？」

「いや、最近ずつとなんだよなー・・・」

「ちょっと、聞こえてるわよ。」

「え。」

哀はジロリとコナンを睨んだ。

「私の機嫌が悪かろうとそうでなかつたら
貴方には関係のないことでしょ？」

「あ、ああ・・・そうだな。」

コナンと博士は目を点にするしかなかった。

キキッ

「わぁ・・・温泉、だね！」

「ええ・・・温泉、ですね！」

「お・・・温泉、だな！」

瞳を輝かせる。

「おい、灰原。着いたぞ。」

「ん・・そう。」

カチャッ

「綺麗な旅館ですね。」

「温泉にはいるの、楽しみ〜!」

「俺たちの部屋、どこだよ!」

「これこれ・・・」

「おい、走るなって。・・・女王様が怒るぞ。」

後ろで腕を組み、睨む哀の姿を見てコナンはつぶやいた。

「女王様って、私のことかしら。」

「他に誰がいるっていうんだよ。」

「じゃあ・・・女王様の荷物、持ってくれない？」

「俺が？」

「他に誰がいるっていうのよ。」

哀はコナンに荷物を差し出す。

「はぁ・・・」

「落とさないでよね。」

「女王様の大切な荷物なんだから。」

「へいへい。」

「あれーコナンくん、何で哀ちゃんの荷物持ってるの?」

「お願いだからそこに触れないでくれ。」

「?」

「こちらがお部屋でございます。」

「このお部屋、ヒイラギって言うんだ。」

「まさに今の時期にぴったりね。」

「このお部屋は桜の花がよく見えるんですよ。
今は冬ですから。」

にこりと笑って説明してくれた。

「こっちは紅葉だってよ!」

「こっちは桜です!」

あっちこっちに転々として元太と光彦は叫んだ。

「そこのお部屋は秋になると紅葉が綺麗に見えるんです。
そして、そこのお部屋は春になると桜が満開に咲くんですよ。」

「へえ・・・それぞれ見える花の名前を部屋に割り振ってるわけね。」

「なんだかロマンティック。」

「・・・重い。」

「あなたね、感動しているそばからそんなこと言わないでくれる？
崩れるわ。」

「あのなあ、おもてーんだよこれ！」

「あら、私女王様なんでしょ？
女王様にそんな重たいものを持たせる気？」

「・・・お前、女王様って言ったの、気にしてるのか？」

「別に。」

「コナンは目が点になり、哀は睨んでいる。」

「さあ、どつぞ。」

中へと入っていった。

Sun Flower . part 3 (後書き)

遅くなつてすみません!!

次回もまた、宜しくお願いします!!

Sun Flower・part 4

「わぁ、ひろーい!!」

「部屋がたくさんあります!」

「おい、こっち来いよ!!風呂場も広いぜ!」

「わぁ、早くお風呂入れようよ!入りたい!」

「おいおい・・・風呂はそこじゃなくて・・・」

「あ、そっか!」

「」「大浴場!」「」

3人はおおはしやぎ。

「どうする？博士。」

先に風呂に入るか？」

「わしはどつちでもかまわんが・・・」

「ねえ、先に入っちゃおうよ！」

「そうですね。」

「俺もう入る気満々だぜ！」

「んじゃあ、今から一時間後にココに戻ってきて
夕飯にしようぜ。」

「行こ、哀ちゃん。」

「悪いけど、私はパス。」

「おいおい・・・お前ココにきてまで雰囲気ぶち壊すなよな。」

「うるさいわね、疲れてるのよ。」

お風呂なら私が好きなときに入るから。

吉田さん、ごめんなさいね。」

「あ・・・ううん。気にしないで。」

じゃ、元太君、光彦君、行こう？。」

「おお！」

「はい！」

3人で仲良く歩くところを見送る。

「・・・灰原、オメー何怒ってんだよ。」

「別に。」

「うそつけ。顔が怒ってるのバレバレ。」

「私はもともとこういう顔なのよ。」

「大体、風呂くらい一緒に入ってやれよな・・・
歩美ちゃん、完全に作り笑いしてたぞ。
お前にだってわかってたんだろ？」

「・・・」

「何で怒ってんのかしらねえけど
夕飯はちゃんとカルシウムとっておけよ？」

コナンはそっくり残すと部屋をあとにした。

「はぁ・・・つたく、本当に女心をわかってないのね。
あれでちゃんと探偵が務まってるのが怖いわ。」

哀は柊の花を見つめながらそうつぶやいた。

Sun Flower . part 4 (後書き)

次回もよろしくです!!

Sun Flower・part 5

「はー、気持ちよかった
あれー、哀ちゃん何読んでるの？」

「え？ああ・・・科学者の苦悩。っていう
ゾクゾクしちゃうような話よ。」

「へえ。
終わったら歩美にも見せて！」

「いいけど・・・死体とか殺しとか・・・
あるし、漢字も沢山あるから読めないわよ？」

「そうなんだ・・・歩美には無理そうだね。」

そう言って笑顔を向ける。

「吉田さん、一緒に入らなくて・・・
怒ってる？」

「え？なんでー？」

「そりゃ、ちよつと悲しかったけど・・・
でも、哀ちゃんが入りたくないって言ってるんだもん
無理には誘えないでしょ？」

「吉田さん・・・」

「あ、ねえ！哀ちゃん、柊の花が月の光で輝いてる！
宝石みたい。綺麗だね！」

「ええ・・・」

「へえ、ここ、柊だけじゃなく
月も綺麗に見えるんだな。」

「わっコナン君！ビックリした・・・」

「貴方ね・・・人間なら人間らしく物音くらい立てなさいよ。
ビックリするじゃない・・・」

「わりーわりー。」

悪そうに詫びないコナンに哀はため息を漏らした。

「そろそろ夕飯の準備しに来るんじゃない？」

「え？ここつてバイキングとかじゃないの？」

「ああ・・・ここは旅館だからこの人が持ってきてくれんだよ。指定の時間にな。」

「へえ。」

「はいはい・・・探偵さんは何でも知ってていいわね？」

「あのなあ・・・嫌味にしか聞こえねえんだけど。」

「別に。」

「まあ・・・ちなみのその引き戸をひいてみると・・・」

「わあ・・・!!」

「綺麗な天女の絵が飾られてるんだぜ。」

それさ、ジグソーパズルで、この女将さんの趣味らしいんだ。あまりにも作りすぎたらしくて一部屋一部屋に飾ってるんだぜ。

確か・・・サクラの部屋は女神。スミレの部屋は天使。

ヒマワリの部屋はうさぎ。コスモスの部屋は妖精。

っと・・・こんな具合にさ。」

「・・・かなり詳しいのね。」

「ああ・・・前にここで殺人事件があつて・・・」

「殺人事件つて・・・」

「大丈夫、現場はもう使われてないからよ!」

「そういう意味じゃないわよ・・・ったく。
それより、小嶋君たちは？」

「ああ・・・まだ入ってるぜ。
遅いから先にあがつてきたんだ。」

「ふーん。」

ダダダダダダッ

バンッ

「元太、少し静かに・・・って光彦かよ。」

「た、大変です！」

光彦の後ろから元太が息を切らしてやってくる。

「た、大変だ！」

「どうしたの？」

「殺人事件か！？」

「・・・なんで嬉しそうなのよ。」

「人が殺されることがそんなに嬉しいの？」

「そうじゃなくて・・・」

「最近事件がご無沙汰だったから・・・
謎解きしてーな、って思ってた・・・」

「だったら、なぜなぞでも解いてなさいよ。」

「あれは簡単すぎるんだよ！」

「だったら難しいのやればいいでしょ？」

「そーじゃなくて！」

「どうでもいいんですよ、そんなのー！」

と、とりあえず・・・僕についてきてくださいー！」

「「「？」」」

とりあえず、光彦についていくことになった。

Sun Flower・part 5 (後書き)

さて・・・

殺人事件、なのでしょうか？

それとも・・・。

Sun Flower・part 6

「おい、光彦。」

「一体何があつたんだよ。」

「あの人、見てください!!」

指をさす方向を見る。

腰まであるだろう長い黒髪はゆるくカールされている。

真っ白な肌にうつすらと頬はピンク。

薄い唇。

世間では一般的に「美人」の分類に入る

1人の女が周りにちやほやされながら笑っている。

「あの人がどうかしたか？」

「なんか、女将さんとか手懷けてるけど・・・
どっかの令嬢なのかしら？」

「いえ、違いますよ！」

「じゃあ、誰なの？あの人。」

「新一さんの恋人らしいんですよ！」

「「はあ!？」」

コナンと哀は同時に声を出す。

「ちよつと、工藤君。

貴方いつの間にあんな人に出会ったのよ。」

「しらねえよ。

第一、名前も知らないんだからよ!」

「だったら何で名乗ってるのよ。彼女だつて。」

「だーから、しらねえよ!

大体、新一なんて珍しい名前じゃねえだろ。」

「あのー、コナン君、灰原さん・・・
僕の話し、聞いてますか？」

「あ、わり・・・」

「で・・・彼女は高校生探偵の工藤新一の彼女だって
言ってるの？」

「はい。何でも新一さんがここで起きた殺人事件を解決したらしく
て・・・

ここの旅館の人結構新一さんに恩を感じてるそうなんですよ。」

「だから、彼の恋人だというだけであんなにちやほやとされてるの
ね。」

「はい。」

「でもさー、新一お兄さんの恋人って蘭お姉さんでしょ？」

「二股なんじゃねえか？」

「ひどいですね、それは。」

男の風上にもおけません！女性の敵です！！」

「おいおい・・・」

「まあまあ・・・私の見たところ。
彼女は偽者ね。」

「え？偽者？」

目を丸くする歩美。

「ええ。

でしょ？『江戸川君』？」

「……。ああ、新一兄ちゃんは二股するような男じゃないよ。
それに……」

「それに？」

「ら、蘭姉ちゃんのこと以外はが、眼中にないと……
思う……」

ズキンッ

真っ赤になりながら答えたコナンの姿と
言葉に哀はとまどいを隠せないでいた。

「そっかー、そうだよねえ。」

「じゃあ、何であの人・・・そんなうそついてるんでしょう・・・」

「金でも貰うっていう魂胆じゃねえか？」

「そうでしょうか・・・」

「ま、嘘なんてすぐバレるものよ。
本人がそれで気がすむのならいいじゃない。
ほっときなさいよ。」

「だけど・・・」

「ま、ここは灰原の言うとおりほっとけ。
そのうち本人も飽きるだろ。」

納得できない様子の3人を置いて再び歩き出す2人。

「そっいえば、博士どうした？」

「ああ、博士ならまだ入ってますよ。」

「はあ？いい加減のぼせるぞ？」

「っていうか、夕飯に間に合わないわよ。」

「だ、だよな・・・」

「僕、呼んで来ます。先に戻っててください。」

「あー、じゃあ、よろしくな、光彦。」

「はい。」

Sun Flower・part 6（後書き）

まさかの偽者？

いやあ、これ・・・

ある少女漫画にあったんですよ。

偽者を偽った美しい女性が居て・・・

でも本物はただの子供みtain対して美しくもない女の子。

その子は自分が本物だっけ言うんですけど信じてもらえないんですよ。

そこで考えたのが・・・

『新一の彼女だっけ嘘つくやつがいたら・・・？』

でした。

これにどう対処するのも自分としては楽しみで書きたかったんですよ。

3年越しの夢でした・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0689y/>

冬の向日葵

2011年11月17日21時10分発行